

「支那事変出征校友関係文書」

はじめに

「支那事変出征校友関係文書」とは、立教大学庶務課が保管していた日中戦争に出征した立教大学卒業者（校友）、在籍学生、教職員、保護者から立教大学に送付された書簡を纏めたものである。庶務課が保管していた書簡は三七件（一件は封筒のみ）に上る。時期は日中戦争が勃発した一九三七（昭和一二）～三九年（年月日不明を除く）にかけてである。多くは立教大学や校友会からの慰問品への御礼状として戦地から立教大学に向けて出されたものであった。また、その大半が軍事郵便で送られていた。本関係文書は、庶務課から立教大学図書館大
学史資料室（旧大学史資料室）に移管され（移管時期は

太田久元

不明）、その後旧大学史資料室から立教学院史資料センターに業務が移管されたことに伴い、資料センターで保存・管理されている史料である。本稿では、立教大学学生、教職員、校友の満洲事変以後の出征者について概観した上で、「関係文書」に残された書簡について解説していく。

一、軍事郵便とは

軍事郵便とは、戦時または事変の際に戦地や軍関係根拠地、これに準ずる地にある軍人軍属などが発出した郵便物や、軍人軍属の家族、縁者、銃後から軍人軍属に宛てた郵便物のことをいう^①。立教大学に残る「支那事変出征校友関係文書」は、出征した校友が戦地などから立

教大に宛てた郵便物が大半を占めるため、この軍事郵便で送られたものが立教大学庶務課で保管された。

日本の軍事郵便制度が確立したのは、日清戦争の際であった。日清間での情勢が緊迫を深める中、一八九四(明治二七)年六月一日、勅令第六七号が出された。

この勅令において、戦時や事変に際して海外に派遣された軍隊、軍艦、軍衙などの軍人軍属より発せられた郵便物は軍事郵便とされ、郵便税を免除すること、また軍人軍属に宛てて発せられた郵便物は郵便税を完納したものに限り規定された⁽²⁾。また、一六日に通信省から「軍事郵便取扱細則」が公達され、軍事郵便物は公用郵便物と私用郵便物に分けられ、将校及同相当官、高等文官(一ヶ月に三通)、准士官下士兵卒など(一ヶ月に一通)と階級によって制限が設けられた⁽³⁾。この制限は翌一八九五年にはそれぞれ一ヶ月に四通、二通と緩和された⁽⁴⁾。

日露戦争では勅令第六七号に代わり、一九〇四年二月五日に勅令第一九号が發布され、「戦時又ハ事変ニ際シ戦地若ハ之ニ准スヘキ地ニ在リ又ハ該地ニ派遣スル軍隊、軍艦、水雷艇、軍衙、軍人又ハ軍属ヨリ発スル郵便物」、軍人軍属に宛てた郵便物とされた⁽⁴⁾。二月六日には、通信省から「軍事郵便規則」が省令第六号として出され、軍人軍属から出される郵便物は、通常郵便物が書

状一通の重量を公用は五〇匁(約一八七.五g)、私用は四匁(約一五g)、従軍記者等の軍事通信は五〇匁までと制限され、それ以外に軍事郵便葉書、私製葉書の使用、小包郵便物に関しては公用に限られた。また、軍人軍属などに宛てた郵便物は通常郵便物は書状、郵便葉書、毎月一回以上刊行する定期刊行物、書籍、印刷物、写真、小包郵便物とされた⁽⁵⁾。また、通信省は「軍事郵便取扱規程」(一九〇四年二月六日)、陸軍省は「野戦郵便局勤務令」(二月一三日)、海軍省は「艦船郵便所規程」(二月二四日)をそれぞれ制定した。こうした法令はその後、陸軍が「野戦郵便勤務令」(一九一八(大正七)年一〇月一九日制定、軍令陸乙第五二号)、「野戦郵便隊勤務令」(一九四一年軍令陸乙第二九号)、海軍が「海軍軍用郵便所規程」(一九一七年一月二二日制定)、「海軍軍用郵便事務規程」(一九四〇年二月一日制定)と改正していく⁽⁶⁾。

軍事郵便で送られた郵便量は、日清戦争時に一二三九万九八〇〇通、日露戦争時には四億五九一二万九〇〇〇通、日中戦争時(一九三七〜四一年)には毎年四億通が取扱われた⁽⁷⁾。軍事郵便は法務官や憲兵により検閲されたことが広く一般に知られているが、郵便物の取扱量の増加により検閲を免れた事例や、検閲済印が捺された未使用の封筒を使用するなど、検閲を免れた軍事郵便も多

くあり、また検閲を逃れるため、自ら地名などを「○」と伏せる事例も多く散見される⁽⁸⁾。「支那事変出征校友関係文書」に所収されている書簡には、明確に検閲をされたことを示すような墨塗りなどは無かったが、所属部隊の所在地などを「○○」として自身で伏せている書簡はあった。本関係文書は、多くが立教大学からの慰問品に対する礼状であり、書簡の内容が検閲で墨塗を受けるものでは無かったこともあるだろうが、戦地での様子や部隊内での立教大学関係者との交流など興味深い記事もあり、これらについては後述する。

二、立教大学関係者の出征

一九三一年の満洲事変では、人的動員などが限定されていたこともあり、立教大学関係者の出征は教例に過ぎなかったと推定されているが、一九三七年七月七日の盧溝橋事件から始まった日中戦争、その後のアジア・太平洋戦争では数多くの立教大学関係者が出征した⁽⁹⁾。一九三七年九月二十九日発行の『立教学院学報』では、開戦後二ヶ月余りで教職員四名（内一名、配属将校）、在校生二名の出征が報じられた⁽¹⁰⁾。また、十一月一日の『立教学院学報』において、立教大学・中学校卒業者の出征者に対する情報収集のための呼びかけを行っている。

今次の事変に際し、本学院関係の応召者を全部統一

して知りたいのですが、何分各方面にわたる多くの校友ですので分り兼ね、取敢へず大学の校友会各部に問合せて判明せる方の氏名を発表致します。なほ知友にて御分りの方は大学、中学の庶務課へ御知らせ願へれば幸都合です。

この際には、出身校友会各部ごとに計四六名の校友氏名を報じた⁽¹¹⁾。その後、校友会事務局においても調査が行われ、十一月二十九日発行の『立教学院学報』では前号で判明した校友を含む在学生以外の大学教職員四名・校友九二名、中学校教員一名・校友二名が報じられた⁽¹²⁾。その後も調査が行われ、一九三九年六月頃には三一九名の立教学院校友の出征が確認されている⁽¹³⁾。その後、日中戦争の長期化、対米英蘭戦争開戦の現実化により、在学生も召集、出征の対象となった。一九四一年一〇月一六日の兵役法の改正、「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」により在学・修業年限がそれぞれ六ヶ月以内短縮され、一九四一年度学部卒業生は一二月に臨時徴兵検査を受け、合格者は一九四二年二月に入営となった。また、その後の戦局の悪化により、一九四三年一〇月一日の「在学徴集延期臨時特例」により、文科系の学生生徒に対する在学徴集延期が停止され、在学中の学生も陸海軍に入営する「学徒出陣」が始まった。立教大学は文学部、経済学部の文科系学部の二

学部で構成されていたため、一九三九年四月から一九四五年四月までの入学者で在学中に出征した者は暫定した数ではあるが一二四七名を数えることとなる¹⁴⁾。一方、一九三九年まで立教学院、校友会などで情報収集を行っていた卒業生などの校友の出征者は、一九三九年以降把握されていない¹⁵⁾。

三、『立教学院学報』に掲載された出征教員・校友の軍事郵便

本稿で史料紹介を行った「支那事変出征校友関係文書」は、立教大学に来信した軍事郵便の一部しか所収されていない。なぜなら、『立教学院学報』には、出征した教員、校友から来信した軍事郵便が数多く記事として掲載しているからである。『立教学院学報』は、世界恐慌後のアメリカ聖公会の財政状況の悪化による補助金の減少、大規模な立教学院拡張計画案が模索される中で、「自給」を図る目的をもって結成された立教学院維持会の事業達成のため、「学院・各校の状況、学生生徒・校友の動静とともに、維持会の抱金状況・会計などについて報じ」る出版物として、一九三四年六月一日に創刊された¹⁶⁾。

しかし、日中戦争下、『立教学院学報』は、編集体制の変化があった。一九三九年一月三〇日発行の『立教

学院学報』の「編集後記」には「本号は七月末遅くも九月初旬には発行の運びに致度予定で原稿も集めたのですが、其の後編集者の更迭やら何やらで順繰りに遅れて誠に申し訳なく存じて居ります」と記載している。一九三八年一〇月に発行された『立教学院学報』第五卷第八号から一九三九年一月に発刊された第五卷秋季号と発行に一年程の期間が空いている。この間の様子が一九四〇年五月二八日発行の『立教学院学報』の「学報欄」で記述されている。

昨年十月、学部三年（当時）の中島一男先輩を総務として新に成立を見た立教学院学報編集所は遠山郁三学長の直屬機関とし小山榮三教授¹⁷⁾の指導の下に本年更にその活動を続行して居る大立教大学の学生文化の啓発機関であり、その目的として居る所は新聞紙面に見受¹⁸⁾られる立教学生の親睦と啓発とにある。

斯る重大任務の達成のため編集所員たる学生はその学業の大半を活用し学報発行の事業に邁進して居るのであるから希くば学生諸君の絶大なる援助を仰がれん事を編集員として切望して居る。勿論その業拙しと雖も渾身の努力を捻出して斯道斯学の本快に近づかん事を切願して居るものである¹⁹⁾。

このように、『立教学院学報』編集部は、遠山郁三立

教大学院長の直屬機関として学生が主体で構成されるように変化した。一九四〇年一月一八日発行の『立教学院学報』の「部告」では「本年来学院学報の編輯はミッシン事務所より学生の編輯に移ったことが明記され、第六巻からそれまでの冊子体から新聞紙体へと発行形態も変化した²⁰⁾。一九四〇年一月一七日発行の『立教学院学報』の「編集室より」には、「幸ひにして学報編集部は大学当局の文書発行事務の一機関であつて学報の発行はすべて大学庶務課で行ふ(中略)学報編集部は大学当局の一機関であつて単なる学内の学生団体ではない事をよく知つていたゞきたいと思ふ」と記載されており²¹⁾、これらの点から学報編集部が戦時下の日米関係の悪化に伴い、編集主体がミッシン事務所から学生団体となつたことが窺われる。これは、「一九四〇年一月四日の第三五回理事会において理事長を退任したライフスナイダーは、在日本エピソード宣教師社団管理下にある立教学院が現在使用している土地・建物全部を、財団法人立教学院に譲渡する用意があることを表明した²²⁾」こととも関連があると考えられる。さらに、定期発行が大学当局の好意による予算によつて行われたことが記述されており²³⁾、一九三八年から三九年の間に『立教学院学報』の大学内での位置づけが変化したのである。また、発行された『立教学院学報』は「遠く海外にありて戦え

る先輩諸氏へも配属将校室と連絡を取り大学のニュースをお伝へする手筈となつて居る」と戦地にも送付されることとなつた²⁴⁾。

この『立教学院学報』は、日中戦争に出征した教員、校友の状況や戦死した記事なども掲載された。まずはその掲載された記事から紹介したい。一九三八年一月三十一日発行の『立教学院学報』では、一九三七年八月に出征した予科専任教授和田正俊(漢文)からの通信があつた旨が紹介されている。

(前略)次に小生渡支以来至極頑健にて軍務に励み居り候へば左様御休神下度候。扱て何時ぞや御約束の戦時通信仲々暇と心の落付きが無く失礼申上居候。本日は幾分なりとも戦場の風景を御知らせし得る時間を持ち候。

〇〇港を〇月〇日万歳の声と日章旗の波に送られて早〇ヶ月、茲〇〇の〇市にも朝晩は寒冷を覚ゆる候と相成申候。一体当地方は気温は内地の鹿児島位との事に御座候へば北滴や北支の如きことは無きこと、存候。只今小生等は〇〇の〇市の警備に従事致居候。数週間前以前には絶間なく友軍の示威飛行や小銃の音も目に見耳に聞き候も昨今は次第に平靜となり至極平和な状態と相成申候。併し数十万の家屋は見る影もなく破壊され人影は見えず只野犬の群が

死体を漁つて歩く許りに御座候。既に南京も陥落し国民政府は没落か転向かの岐路に立ちし訳に御座候。当地へ来て見て始めて抗日意識の如何に徹底せるかを痛感するものに御座候。(中略)北支方面は皇軍の行く所日章旗を振つて迎ふる由に御座候も当地方は決して左様な殊勝な心掛はなく油断すれば手榴弾を投げつけられたり拳銃に見舞はるゝ位が関の山に御座候。現に先達つても二三の実例有之候。併し月日の力は偉大にして次第に我皇軍の精銳にして仁慈なる事を覚り、支那人の警備隊も編制され近く治安工作の一端に与らんとの氣運有之候。当地に自治政府建設され真に日支和合共存共栄の日来りて東海の波永遠に静かにして地球東半部の平和を取り戻すこと、存候。先は右甚だ乍簡單戰場通信に替へ度く如斯御座候。校友諸兄に何卒宜敷願上候。敬具²⁴

この和田教授の記事から、立教大学から出征者である和田教授に「戦時通信」の執筆を依頼していることがわかる。また、記述から「北支」華北方面ではないこと、八月二五日に応召していることから、上海攻略を行った上海派遣軍、もしくは杭州攻略を行った第一〇軍といった、その後南京攻略を行う華中方面の部隊に所属していることがわかる。一九三八年一月三十一日の『立教学院学报』に掲載しており、一九三七年一月二三日の南京陥

落も記述されていることから、南京攻略戦やその後の掃討戦に参加した後に記述した書簡であった。和田教授の「数十万の家屋は見る影もなく破壊され人影は見えず只野犬の群が死体を漁つて歩く許りに御座候」という記述からは、戦闘状況の悲惨さが垣間見える。また、「当地へ来て見て始めて抗日意識の如何に徹底せるかを痛感」しており、「油断すれば手榴弾を投げつけられたり拳銃に見舞はるゝ」と、日本軍に対する抗日意識や抵抗の一端がよくわかり、同時代の生々しい情景が記述されている。

次に、一九四〇年一月二八日発行の『立教学院学报』には、「留守部隊訪問」と題した記事で「音楽と兵隊」竹村教授、「子煩悩な和田教授」と、一九三八年六月一日九日に出征した予科専任教授の竹村豊太郎(経済通論、英語)²⁵と和田教授の家族に届いた軍事郵便を紹介すると共に家族へのインタビュー記事を掲載している²⁶。「音楽と兵隊」竹村教授は、竹村教授の家族に「最近にお便りがありましたかと」問い、一通の手紙を示され、以下の様に紹介している。

(前略) 戦闘も一段落して、今は立派な事務室の明るいランプの下で毎日十二時頃迄頑張つてゐる、散歩と撮影の外は何時でも此処に取つてゐる(中略) 乏しい材料での研究と興味を中心としてゐるのは新

しい経済体制を裏付ける理論と支那問題殊に貨幣金融の問題だ殊に新秩序誕生に時代の貨幣現象を観察するに便利な地位に居るのが有難い。写真は実に私を誘惑する、そして唯一の誘惑である。(中略) 兵隊の文化生活を少し報告しよう、先づ読物、但しサンデー毎日か講談倶楽部程度、少しよくてキング、之でも中隊の兵隊は全国一の教育程度の高い連中なのだ、だから惟えらく戦地視察の半可の通談や誇張の通信などで兵隊が娯楽雑誌等に見向きもしない等とあるのは私には信じられない。そんな文献で戦地の兵隊の要求に間違つた解釈をしてはいかん、然し娯楽雑誌丈で充分だと思つてゐない事は事実だ。最近恤兵品としてポータブルのいゝのがレコードと共に寄贈された、勿論レコードは軍歌と流行歌と浪花節である。其後ある人が自費で西洋音楽の通俗的なものを若干買つて来てなかに混ぜて置いたら浪花節にうつとりする連中がカルメンのアリア集に慶びボレロに喝采を送る面白い現象を起した(後略)

と記載し、「ユーモアに富んで而も含蓄ある教授の趣味も偲ばれて、教室での面影がはつきりと思ひ出された。ともかく先生が御元気で御奮闘なされてゐる事は、それ丈で銃後の我々にとつては充分喜ばしいことであ

る」と、学生編集部員の視点だからこそ記述できる記事が掲載されている⁷⁰。また、「子煩悩な和田教授」では、「先生への慰問袋は？」と問へば「何々を送つて呉れ」と戦地から注文をして来ますのでそれを送つてゐますの」との事、仲々平和な銃後安泰を思はしめられた」と編集部員と和田教授の家族とのやり取りが掲載されている⁷¹。また、同号では「戦線だより」として、校友出征者(配属将校を含む)から立教学院へ送られた軍事郵便(一八名)の内容の一部と動静(四二名)が掲載されている⁷²。一九四〇年五月二八日発行の『立教学院学報』では和田教授の「負傷後日語」が掲載されており、後述する「関係文書」所収の書簡に記述されている戦闘での負傷の後日談が記述されている⁷³。この記事は一九三九年四月二一日と末尾に付されているため、一年ほど『立教学院学報』に記載されていなかったことになる。これには前述した『立教学院学報』の編集体制の変化が関係していると考えられる。

四、所収書簡の解説

「支那事变出征校友関係文書」は、立教大学庶務課が保管していたが、その後図書館大学史資料室(旧大学史資料室)に移管・整理され、一九八八年に旧大学史資料室が目録を作成した。その後、旧大学史資料室から立教

学院史資料センターに移管されたものである。史料翻刻を行った順序はこの目録に依拠している。書簡は年月日順に所収されておらず、年月日が順不同なため、年月日が不明の書簡を立教大学が受領した時期の推定が困難であったことを考慮されたい。その点を踏まえた上で、書簡を立教大学が受領したのは、年月日不明を除くと一九三七年一月一八日から一九三九年五月二〇日までの期間である。また、所収されている書簡の内訳は、教職員三名五件（内一件封筒のみ）、校友二七名（文学部一名、商学部・経済学部（一九三二年商学部を改称）及びその子科二五名、立教中学校一名）二九件、校友父兄二名二件、人名不詳一件であった。受領した書簡は庶務課が管理したが、「支那事変出征校友関係文書」の最初に「支那事変出征校友各位に先般慰問品送附致候別紙の如く各地より札状着校仕り候間何卒御覽被下度候」との庶務課の記載があり、教職員の他、学生人事課、学友会、学生課、会計課、図書館に回覧された。

またこの関係文書でいう校友とは、立教学院校友会の会員のことである。「立教学院校友会々々」では、会員に「立教学校、立教大学校、英和学舎、立教学校、東京英語専修学校、立教中学校、立教大学ノ卒業者、及び立教中学校ヨリ直接上級学校へ入学シタル者」に加え、立教大学、立教中学校の在任中の教職員、過去に立教関係

各校に在勤した教職員や学籍を有していた者の中で校友会理事会の承認を経た者などがなった³³⁾。

さて、庶務課が記載している「支那事変出征校友各位に先般慰問品送附致候」の慰問品の送付とは一体いつの時期であったのであろうか。「学生課日誌」には、一九三七年九月一日に本関係文書に所収されている学生課主事で予科専任教授であった和田正俊（八月二五日応召）、学生課書記の近藤英（八月一八日応召）が充員応召されたことが記載されている³⁴⁾。その翌月五日、学生課は「支那事変時局ニ鑑ミ陸海軍献金ニ付学部学生各委員ニ対シ一人宛五十錢以上醸出ヲ十一日月曜迄ニ取纏ムル様達シ置ク」との通達を出している。ただし、これは「陸海軍献金」であり、一〇月一二日に遠山郁三学長及び学生代表が陸海軍省に国防献金を行ったことを指すものと思われる³⁵⁾。

その後、一九三八年三月二六日発行の『立教学院学報』には「本学に於ては、日支事変につき、教職員一同当分俸給の二百分の一を割き、これを以て、大学関係者にて出征中の諸氏に慰問袋、其他の費に充てること、なし武藤教授専らその衝に当りて、已に出先きの判明せる諸氏七十余名にその発送をなす準備をなせり。未だ所属隊名不明の諸氏もあるに付き、お心当りの方は同教授まで一報を煩はされたし³⁶⁾」とし、教務課長である武藤安

雄文学部教授兼予科教授を中心として大学関係者の出征者の慰問品送付の取り纏めをおこなった。この出征者に対する慰問品送付に対する礼状がこの「関係文書」に所収されたものであると考えられる。

以後、「関係文書」のいくつかの書簡を抜粋して紹介していくが、教職員を除く校友については氏名を伏せ、アルファベット表記とした。その点は留意されたい。最初に紹介するのは、『立教学院学報』に何度か掲載された和田正俊教授である。和田教授は、一九三八年五月二日に戦傷し、野戦病院に入院加療中であることが『立教学院学報』の個人消息で記載されているが³²、31〜33の書簡はその後に立教大学に来信したものである。また、33は封筒のみであるため庶務課の受付日と発信日のみ記載した。31では、六月二二日に全快し軍務に復帰したことや、遠山郁三学長、教職員が留守宅にお見舞に行ったことへの返礼であった。また、庶務課から和田教授の書簡の回覧が行われたことがわかり、学部教務課、学生人事課、学生会事務所、配属将校室、図書館が対象であった。こうした回覧が付されているのは本書簡のみであり、和田教授が学生課主事であったためと考えられる。32では記述量は少ないが日中戦争の山岳戦の激戦の状況がわかる。

和田教授は陸軍少尉として応召していたため小隊を率

いていたが、偶然にも同部隊に立教大学の校友出征者が部下として配属された。この和田教授の小隊に配属された校友の書簡がCの3、4になる。この二つの書簡の内容から時期としては、4が一九三八年八月、3が「漢口攻略戦に参加」と記述されていることから、一九三八年一二月の書簡だと考えられる。4では「和田先生と同小隊に起居」していたことが書かれており、和田教授が一時負傷の後、療養回復後再び小隊の指揮をとっていたことが記述されている。3では、和田教授の小隊で各地を転戦し、武漢攻略作戦に参加、九江方面（江西省）から進軍し九月二七日の廬山付近での激戦で和田教授、Cともに負傷した。Cはその後和田教授の消息がわからないまま、大阪の陸軍病院に入院した。このように、教員と校友が同じ部隊で指揮官と部下の関係になっていたことがわかる史料は興味深い。

こうした教員と校友、在学生が同じ部隊や同じ地域で交流したことがわかる書簡は別にもある。それが1、6、13、17、21、24、34の書簡である。

1と34ではAとZが時々交流していたことが伺われる。また、Zは24のTとも戦地で出会っており、24ではTが出征以来、Zの他にiとjの三名しか出会っていないことや、iの負傷を記載している。Zは34の書簡の中で校友のkと会ったことを記載している他、立教大学か

ら小包が送られ、「全室の者みなで封を開く様な有様、戦地に於て内地からの便りがどんなにうれしいかお話し出来ない程です。まして三ヶ月も全く内地からの音信もないのですから三月も前の新聞をうばい合つて見る様な始末です」と、内地からの郵便や新聞などが送られてくることのうれしさを記述している。これは他の書簡でも散見され、軍事郵便でよく書かれていたことでもある。21のQは、「陣中に居りますと内地より御書状いたゞくのが何より本当に嬉しく存じます。先生方にも御暇が御座いましたら是非御書状いたゞけます様伏して御願ひ致します」と書き添えている。

6のEは、同じ部隊に同級生のbがおり、「共に奇遇に驚き且つ喜び遠く懐かしき学園の思ひ出に語り居り候」と記述している。13のJは満洲での国境警備に勤務中、病氣となり内地送還となったが、その途次で立教大学の校友六名が一同に会し記念撮影をし、写真も同封したことが記述されている。しかし、写真については現存していないため、散逸したようである。17のNは立教中学校の卒業生で、北満洲の「当駐屯地には立教出身者(学部三中心)若干あり。北満立教会が出来そうです。遠く離れて同校出身者の集るのも何とも言へません。」と、大学出身者三名、中学出身者二名の計五名が同じ駐屯地にいることを報じ、「北満立教会が出来そうです」

と、同じ学校出身者が集まっていることに感慨深げな記述を残している。

21のQの書簡では、同期生である歌手のデイック・ミネの慰問旅行(一九三八年)中に出会ったことに触れ、「色々諸先生方の御様子或は同窓生の有様等も聞かせて貰ひましたが色々心強く存じますと共に本当に何もかもなつかしく存じ一入学生時代が思ひ出されて仕方有りませんでした」と学生時代を回顧している一方で、「戦争は仮令どんな事をしてゞも必ず勝たなければ成らない」と記述しているように、当時の勇ましさが求められる時代背景も垣間見せる。

こうした立教大学出身者同士交流が軍事郵便に書かれるのは、やはり母校宛の書簡であり、母校に校友、立教関係者の近況を少しでも伝えようとしたのだと思われる。また、立教が慰問品として送つたものには、日用品や娯楽品などの他に講演集や会報(『立教学院学報』だと考えられる)なども送られたようだ。9のGは、前述した『立教学院学報』で掲載された和田教授の戦時通信を読んだのだろうか、「戦線ニュース御送附致します」と最後に記述している。立教大学からの慰問品送付については、37の中で「出身校からの慰問にて同室の他大出陣将校等も其の鄭重にして親切なるに驚いて居ります」と記述しているように、他大出身者にとって、立

教大学の慰問品は驚くほどであった。

立教大学の慰問品が、連戦続きで一二月まで受領出来なかつたのが、2のB（文学部宗教学科出身）であるが、キリスト教の用語である「聖籠」⁸⁷⁾や「御加禱」を使用し、その後「時宛もキリストマスシーズン⁸⁸⁾の事として思はぬクリスマスプレゼントと殊の他に有難く嬉しく思ひました」とキリスト教主義の学校出身者であるからこそ⁸⁹⁾の記述もある。また、8のFは次のように戦場となった中国での教会について書き記している。

出征以来早や一年半江南、江北の野を駆け廻つて参りましたが、殆んどどの町村にも教会があるのです。徐州戦の折〇〇は、この地方特有の泥壁の家、小生等の宿営した家も泥壁の家、民家と変りありませんが、入口には「福音堂」と記され、粗末な十字架が建てられてゐるではありませんか。小さな土間には何物もなくこゝが、どうして礼拝室と考へる事が出来ませうか。こんな、へんぴな小村迄教会があるとは思ひませんでした。

時々この教会の壁にも敵弾が当たりました。当時支那人一人居らぬ死の村でしたが今では、皇軍の保護の下にこのまづしい教会にも静かな祈りがあげられてゐることでせう。

この文面からはFの中国に対する蔑視感もみられる

が、中国でのキリスト教の伝播の様子や、戦地の小村の教会の様子が記述され、キリスト教を学んだ立教大学出身の出征者だからこそ気付く視点もあり興味深い。

おわりに

「支那事変出征校友関係文書」に所収されている書簡は、教職員を除けば文学部一名を除き、商学部、経済学部またはその予科であった。立教大学が一九二二年に大学令によって旧制大学となった後、一九二二〜三〇年にかけて文学部、商学部の毎年度の在籍者数は予科も含めて商学部が文学部の二〜四倍の在籍学生がいた⁹⁰⁾。また、一九三九年四月から一九四五年四月までの立教大学入学者の在学中出征者は、現在確認できている数値で文学部四〇名に対し、経済学部二二〇七名である⁹¹⁾。こうした立教大学の現状から商学部、経済学部出身者が大半を占めることとなった。

また、関係文書に所収されている書簡は、一九三七年一二月から一九三九年までの二年間に限られおり、立教大学からの慰問品に対する礼状という形式が多数を占める。しかし、その内容には立教大学出身者間の戦地での交流や、キリスト教主義の大学であるからこそその視点や記述も見られ、内容的にも興味深い記載がある。また、15のLが「元氣一倍他の先輩諸兄に負けぬ如く一層の努

力を以つて『朝に夕に鍛えつ練りつ』全国の為に死を以つて御奉公致します」と、軍事郵便に見られる勇壮さの中に立教大学の校歌「栄光の立教」の一節である『朝に夕に鍛えつ練りつ』を入れることで愛校心を見せているが、こうした記述は22のRの「野球部員一同の元氣なニュースを時々拝見致して居りますが今秋も残念な御成績でしたが一同のスピリトがないのと、努力が少々ほしい様に思われますが何分宜しくお願ひ致します」といった野球部への叱咤激励など、他の書簡でも散見される。このような出征者から出身大学に宛てた軍事郵便が多数残存していることは珍しいことではないだろうか。

以下、所収書簡の翻刻部分に入るが、翻刻者の力量不足により解説不明や誤読などがあると思われるが、その点はどうかご海容頂ければ幸いである。

註

(1) 近年の軍事郵便の研究は、国立歴史民俗博物館の共同研究として行われた兵士の実像に焦点をあてた研究によって先鞭がつけられ、その際の実共同研究者である新井勝紘氏を中心に軍事郵便に関する研究が進展した。新井氏は『専修史学』四三三号(二〇〇七年一月)、同五三三号(二〇一二年一月)と二度にわたり「軍事郵便研究」の特集号を行った。代表的な研究として以下のものが挙げられる。藤井忠俊・関沢まゆみ編『国立歴史民俗博物館研究報告第一〇一編 近現代の兵士の実像Ⅰ 村と戦場』(二〇〇三年三月)、新井勝紘「軍事郵便の基礎

的研究」(序)〔国立歴史民俗博物館研究報告第一〇一編 近現代の兵士の実像Ⅰ 村と戦場』、二〇〇六年一月)、同「パーソナル・メディアとしての軍事郵便―兵士と銃後の戦争体験共有化―」〔歴史評論』第六八二号、二〇〇七年二月)、後藤康行「メディアとしてみる軍事郵便―パーソナル・メディアという視点から―」〔専修史学』第四三三号、二〇〇七年一月)、財満幸恵「戦中の軍事郵便とその検閲について」〔昭和のくらし研究』第八号、昭和館、二〇一〇年三月)、後藤康行「軍事郵便によるコミュニケーションの形成―個人と社会にまたがる二重構造―」〔メディア史研究』第四二二号、二〇一七年一月)などがある。本稿における軍事郵便に関する記述は、上記の先行研究に依拠した。

(2) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:A030201757007 「御署名原本・明治二十七年・勅令第六十七号・海外派遣ノ軍隊軍艦軍衛其他軍人軍属ニ関スル郵便物ノ件」〔国立公文書館〕。

(3) 通信省『通信公報令達類篇』第八(一八九五年三月、国立国会図書館近代デジタルコレクション) 一三三二コマ。

(4) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:A030205906007 「御署名原本・明治二十七年・勅令第十九号・軍事郵便物ニ関スル件制定明治二十七年勅令第六十七号(海外派遣ノ軍隊軍艦軍衛其他軍人軍属ニ関スル郵便物ノ件)廃止」〔国立公文書館〕。

(5) 通信省『通信公報令達類篇』第十八ノ上(一九〇五年五月、国立国会図書館近代デジタルコレクション) 三九、四〇コマ。

(6) 前掲、財満幸恵「戦中の軍事郵便とその検閲について」三六―四〇頁。

(7) 前掲、新井勝紘「軍事郵便の基礎的研究」(序)七四頁、後藤康行「メディアとしてみる軍事郵便―パーソナル・メディアという視点か

- ら」二八頁。後藤氏は日露戦争時の郵便量は約七七〇〇万〜約一億五〇〇〇万通ではないかと推定している。
- (8) 同前、新井勝紘「軍事郵便の基礎的研究(序)」、前掲、同「パーソナル・メディアとしての軍事郵便―兵士と銃後の戦争体験共有化―」、前掲、財満幸恵「戦中の軍事郵便とその検閲について」、前掲、後藤康行「軍事郵便によるコミュニケーションの形成―個人と社会にまたがる二重構造―」。
- (9) 本節は、以下の先行研究に依拠した。永井均・豊田雅幸「立教学院関係者の出征と戦没に関する若干の考察」(『立教学院史研究』創刊号、二〇〇三年三月)一〇九〜一四二頁、永井均・豊田雅幸「立教学院関係者の出征と戦没―戦時下の学内変動に関する一考察(老川慶喜・前田一男編『ミッシン・スクールと戦争―立教学院のディレンマ―』東信堂、二〇〇八年)四四二〜四七九頁。立教学院関係者の出征についての詳細は上記の先行研究を参照されたい。
- (10) 『立教学院学報』第四卷第八号、一九三七年九月、一三頁。
- (11) 『立教学院学報』第四卷第九号、一九三七年二月、五頁。
- (12) 『立教学院学報』第四卷第一〇号、一九三七年一月、七頁。
- (13) 前掲、永井均・豊田雅幸「立教学院関係者の出征と戦没―戦時下の学内変動に関する一考察」四四六頁。
- (14) 同前、永井均・豊田雅幸「立教学院関係者の出征と戦没―戦時下の学内変動に関する一考察」四四七〜四五二頁。
- (15) 同前、永井均・豊田雅幸「立教学院関係者の出征と戦没―戦時下の学内変動に関する一考察」四六九〜四七〇頁。
- (16) 立教大学立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』(立教大学、二〇〇八年)九九〜一〇頁。
- (17) 経済学部専任教授。社会学、英語商業学、英語経済学、新聞学概論、演習を担当した。(『立教大学一覽 昭和一四年度』、一九三九年一〇月)。
- (18) 『立教学院学報』第六卷第一号、一九四〇年五月、八頁。
- (19) 『立教学院学報』第六卷第五号、一九四〇年一月、一頁。
- (20) 『立教学院学報』第六卷第四号、一九四〇年一〇月、四頁。
- (21) 大江満「戦時下外国ミッシン教育の危機―立教首脳の動揺と米國聖公会の決断―(前掲、老川慶喜・前田一男編『ミッシン・スクールと戦争―立教学院のディレンマ―』六六頁)。
- (22) 同前、『立教学院学報』第六卷第二号、八頁。
- (23) 同前、『立教学院学報』第六卷第二号、八頁。
- (24) 『立教学院学報』第五卷第一号、一九三八年一月、九・一三頁。
- (25) 「竹村教授応召出征さる。竹村豊太郎教授は六月十九日〇〇〇〇隊に入営。同〇〇〇日〇〇〇〇駅発にて出征されたり。」(『立教学院学報』第五卷第六・七号、一九三八年七月)。竹村教授は一九三四年度の『立教学院一覽』では経済学部の専任教授で記載されているが、出征時には予科専任教授であった。
- (26) 『立教学院学報』第六卷第一号、一九四〇年一月、七頁。
- (27) 同前、『立教学院学報』第六卷第一号、七頁。
- (28) 同前、『立教学院学報』第六卷第一号、七頁。
- (29) 同前、『立教学院学報』第六卷第一号、八頁。
- (30) 前掲、『立教学院学報』第六卷第一号、五頁。
- (31) 「立教学院校友会々則」(昭和十四年版。立教学院校友会員名簿)立教学院校友会、一九三八年)。ちなみに、一九四〇年、立教学院維持会は大学維持会と改組され、大学同窓会と学生父兄、有志からなる大学の財政的援助の中枢機関となり、維持会から立教中学校は除外されることとなった(「大学維持会更新」前掲、『立教学院学報』第六卷

第四号、一頁)。これは、一九四〇年五月に立教中学校が五年後の経済的独立を実現するために立教中学校拡張後援会を組織したことが原因となったと考えられる(前掲、大江満「戦時下外国ミッション教育の危機―立教首脳の動揺と米国聖公会の決断―」六五頁)。

32 『昭和十二年九月 日誌 第五九号 学部学生課』(立教大学立教学院史研究センター所蔵)。

33 『昭和十二年十月 日誌 第六〇号 学部学生課』(立教大学立教学院史研究センター所蔵)。

34 この時の国防献金は総額二六一六円八三銭で、学部学生が一五二円五八銭、予科学生が三九一円五〇銭、学友会が一〇〇〇円、野球部が一〇〇〇円、教職員が七二円五〇銭であった。この内、陸軍省恤兵部に二六一六円八三銭、海軍省恤兵部に一〇〇〇円が献金された。(前掲、『立教学院学報』第四卷第一〇号、九一―一〇頁)。また、この献金に対し、海軍省から感謝状があったことが『立教学院学報』に記載されている。(前掲、『立教学院学報』第五卷第一号、七頁)。

35 『立教学院学報』第五卷第二・三号、一九三八年三月、二二頁。

36 『立教学院学報』第五卷第五号、一九三八年六月、一八頁。

37 「聖寵」とは、「理性的被造物を永遠の命に至らせるため、神がこれに無償で与える超自然の恵み」を意味する語である(小林珍雄編『キリスト教用語辞典』訂正第三版、東京堂、一九六三年)。

38 宮川英一「経理課所蔵資料『収納簿』から見た立教大学学生・生徒の在籍者数推計(一)―一九二三年度より一九三〇年度まで―」(『立教学院史研究』第一八号、二〇二二年二月)二四―四九頁。

39 前掲、永井均・豊田雅幸「立教学院関係者の出征と戦没―戦時下の学内変動に関する一考察―」四四九頁。

「支那事变出征校友関係文書」

支那事变出征校友各位に先般慰問品送附致候処別紙の如く各地より札状着校仕り候間何卒御覽被下度候

立教大学庶務課

教職員各位

学生人事課

学友会

学生会

会計課

図書館

1. 差出人…一九三八年（カ） 二月二〇日付A書簡

（軍事郵便）

拝啓

本日結構なる慰問頂戴仕り有難く感謝申上候。

愈々元氣目下新郷⁽¹⁾平野の一隅に治安維持、宣撫、討伐と邁進致し居り候。

校友乙君（師団輜重主計）とは時折り面会致し居り、母

校運動部の活躍の噂など致し申し居り候。当地寒気〇下十五度位の時有るも既に馴れたる越冬とて、防寒充分にて候。

先は簡單乍ら御礼迄諸先生の御清栄を祈り上げ候。敬具

2. 差出人…一九三八年二月一日付B書簡（軍事郵便）

便）

拝啓 聖寵の下益々御清祥何よりと存じ上げます。

扱此度はお心づくしの結構なるご慰問の品々御送り下さいますして有難う御座いました。実は小生炎暑最中に大都〇〇を進発してより次の大都〇〇の大攻略戦と引続き行はれし大追撃戦に常に参加し、第一線より第一線と引続き出勤中なりし為め、幾月もの間小包受領の機会無く、つひ此程拝受致しました次第ですが、御精選の内容品として流石に何一つ異状無く、時宛もクリスマスシーズンの事とて思はぬクリスマスプレゼントと殊の他に有難く嬉しく思ひました。茲に厚く御礼申上げます。

尚小生は出征以来幾度も混戦にカスリ傷一つ負はず、各種病の流行る中にも頑健そのもの、如く常に任務を遂行致して居りますから、乍他事御安心下さると共に尚此上にも御加禱をお願い申上げます。

乍末筆遙かに母校の健全なる発展を衷心お祈り申しま
す。

昭和十三年十二月十三日

B

立教大学御中

3. 差出人…一九三八年二月一八日付C書簡(普通郵
便) 庶務課受付一二月二〇日

拝啓 向寒の候となりました。諸先生方の御健勝を御喜
び致します。永い間の御無沙汰をお許し下さい。さて小
生昨秋召集を受けて出征して以来はや一年有余を経過致
しました。その間小隊長和田先生⁽²⁾の下に各地に転戦致
し、幸ひ大過なく軍務を果して参りましたが、此の度の
漢口攻略戦⁽³⁾に参加し去る九月二十七日廬山々脈⁽⁴⁾の陳
家嶺の総攻撃に遂に足部に負傷し残念ながら第一線を退
くの止むなきに致りました。和田先生も同日同処にて負
傷されましたが、その後お目に掛る機会なく消息もわか
りません。小生は次第に後方に送られ遂に内地送還とな
り目下大阪の表記病院⁽⁵⁾に収容されて居ります。今は只
一日も早く傷癒えて再び御奉公の出来る日を待つのみで
す。

右不取敢内地帰還の御挨拶申し上げます。

敬具

4. 差出人…一九三八年八月一〇日付C書簡(軍事郵
便)

拝啓残暑酷しき折柄皆様には益々御健勝に亘らせられ慶
賀至極に奉存候。又此の度は御多忙中を御鄭重なる慰問
の品を戴き厚く御礼申し上げます。小生応召の際ご挨拶に
上るべき処心せくま、にお訪ねも致さずその後も御無沙
汰に打ち過ぎ失礼の段深謝仕り候。上陸後遇然和田先生
と同小隊に起居致すこと、相成り先生より通知して戴く
始末面目次第も無之候。

先生も一度御負傷なされ心配致し候も幸ひ快復早く目下
再び同小隊に帰へられ御元氣にて指揮をとれら小生も元
氣にて服務致し居り候。

御地には水害ありたる由悪疫の流行もあること故皆様一
層御自愛下さる様願上候。

右御礼旁々御無沙汰の御詫迄如斯に御座候。 敬具

5. 差出人…一九三八年(カ) 四月二三日付D書簡(書
状のみ所収)

謹啓

時下春暖の候貴校には益々御隆昌の段奉大賀候。陳者小

生出征以来御無音にのみ打ち過ぎ失礼の段平に御容赦被成下度候。

過日は御芳翰を賜り今回は又真心籠りたる数々の御慰問の品々を御恵送被下重々の御芳情の段厚く御礼申上候。

実は早速御礼申上げる処三月十日某地に上陸以来約一ヶ月有余某方面の残敵掃蕩戦に参加致し軍事郵便は全々取扱はざりし為め甚だ遷延致し誠に申訳無之汗顔の至りに御座候。吾が部隊は只今江北の某地警備の任に付きおり候。

当地は皇軍の保護下に着々復興し住民は又安心して各々の職業に就きかつての戦地も現在は破壊せられたる家屋に依りて僅かに思い出す程平和に相成り候。今や聖戦も第二の段階に入り蒋政権も没落の一途にありと雖も尚長期抗戦を吼びおり候得ば小生も乍不及母校の名誉にかけ一層奮闘致す覚悟に御座候。先づは乍乱筆御礼申上度如斯御座候。

四月二十三日

立教大学

御中

中支派遣軍畑気付

波田部隊高橋部隊本部黒河隊

D

謹言

6. 差出人・一九三八年（カ）四月一六日付E書簡（書状のみ所収）

拝呈

時下陽春酣の候学院諸先生には益々御清適の段遠く北支の野より奉大賀上候。

陳者今度は又々結構なる御慰問の品々御恵与賜り御温情の程唯々感謝申上候。

征途早や八ヶ月有余日春去り今や強烈な夏を迎えて益々戦線拡大愈々勇猛元氣一杯最後を掴まんと一同悲壮な意氣に然元居り候。此上は衛生方面に特に肝心一意御奉公の誠致さんの覚悟に御座候。最近小生の属し居る部隊に同級生b君（騎兵少尉）配属され来たる為め共に奇遇に驚き且つ喜び遠く懐かしき学園の思ひ出に語り居り候。近々又々前進命令あるべく武器の手入れに忙殺され居り候。乱文失礼に存じ候ど取急ぎ御礼御挨拶申上候。諸先生の御健勝の程御祈申上候。

四月十六日 出動前夜

北支京漢戦線⁽⁶⁾にて

勿々不一

学院諸先生

玉案下 北支派遣加納部隊獣医部

E 拝

7. 差出人…一九三八年五月一日付E父兄書簡(書状のみ所収)

立教大学

御職員御一同様

御中

拝啓益々御隆昌賀上候。陳ハ今回倅Eへ御慰問品ヲ御恵贈被下候趣、本日戦地ヨリ通信ニヨリ承り申候。御芳志着々忝ク御礼申上候。御蔭様ニテ無事国家へ御奉公いたし居り候ニ付乍他事御放心被下度候。

先ツ不取敢右御礼迄。 敬具

昭和十三年五月十六日

8. 差出人…一九三九年(カ)五月二〇日付F書簡(軍事郵便) 庶務課受付六月六日

拝啓

此度は結構なる慰問品お送り被下有難う御座いました。皆様の御陰をもちまして、小生、益々元氣一杯軍務に精勵致して居りますから御安心下さい。出征以来早や一年半江南、江北の野を駆け廻つて参りましたが、殆んどど

の町村にも教会があるのです。

徐州戦⁽⁷⁾の折〇〇は、この地方特有の泥壁の家、小生等の宿営した家も泥壁の家、民家と変わりありませんが、入口には「福音堂」と記され、粗末な十字架が建てられてゐるではありませんか。小さな土間には何物もなく、が、どうして礼拝室と考へる事が出来ませうか。こんな、へんびな小村迄教会があるとは思ひませんでした。時々この教会の壁にも敵弾が当たりました。当時支那人一人居らぬ死の村でしたが今では、皇軍の保護の下にこのまづしい教会にも静かな祈りがあげられてゐることです。

アカシヤの花盛りも過ぎて又真夏がおとづれました。

揚子江もあめ色に輝いて居ります。

先づは取敢へず御礼まで。

五月廿日

立教大学御中

F

敬具

9. 差出人…一九三八年(カ)九月二三日付G書簡(軍事郵便) 庶務課受付一〇月一日

前略

母校の皆様には永らく御無沙汰申し上げ誠に申し訳も

御座居ません。皆々様益々御活躍の御事と遙かに御欣び申し上げます。

扱て、今般は懐しき母校より沢山の御慰問品を頂戴、出て来る物次から次と有難い何よりのものばかり、本当に恐縮の至りにて御厚情衷心より感謝致します。

小生も入営以来一年半を北〇警備に当り今夏待望の北支戦線に舞台は一変日夜粉骨砕心御奉公の実を挙ぐ可く努力致してをります。先般の戦闘にて愛馬を失ひ吾々も「明日の命を誰が知る」⁽⁸⁾と歌の文句のような生活であります。悪疫の大流行は戦場の常ながら当〇〇地も相当なもので悩んでをります。交通の不自由なる前線は通信をも殆んど無く小包内の講演集、会報等は全く興味深々たるもので有難く新知識として拝読致しました。

吾々十一年卒業の者も数名来てをる様であります但未だに一度も出会はず、同じ戦場で働いてゐるのかと思ふと益々元氣も出ます。今後は皆々様銃後の力強き御声援に對しても愈々志気旺盛立派なる働きを致し皇軍の一員として其の重大任務をはたす覚悟であります。将来共不相變御指導御鞭撻の程幾重にも御頼申し上げます。最後に立教学園皆様の御健闘を御祈り致します。生あらば後便にて戦線ニュース御送附致します。乍乱筆右御礼迄。

敬具

九月二十三日

立教大学々長殿

北支戦線にて

机下

G

10. 差出人…一九三九年一月一八日付日書簡(軍事郵便)

拝啓愈々御多祥奉賀候。其后は意外の御無沙汰仕り此段深く御詫申上候。此度の武漢作戦⁽⁹⁾には須日にして后方勤務を命ぜられ、其后病を得て病院生活三ヶ月にして去る一月十日に原隊に復帰せる次第にて何等の働きも不得致、犠牲となりたる多くの戦友に對して申訳無之、又銃後の御期待に副ひ得ず洵に慙愧に耐へざる処に御座候。此上は洵に信する努力を以て御奉公致し御期待に副ふ如く致し度と存居候。

扱、此度は七月十日附を以て結構なる御慰問の品度々御送附下され、御厚情に對し衷心より御礼申上候。此感謝の微意を教職員校友各位に宜敷く御伝言下さらば幸甚に御座候。

然に予而より昭和十四年度陸軍經理部見習士官志願致し昨年四月には書類調製に當つては御好意を忝なし。去る七月には初審試験として学科試験受験仕り学科は合格仕候。次で再審試験として口述試験を近く受験致すことと相成居候。合格の節は来る四月より東京に於て教育を受

くると相成るべく、其節は諸先生にも拝顔の機を得たく、又予科新校舎參觀致し度く期待致居候。先は右御礼並に近況御知らせ迄に御座候。

教職員並に校友各位の御健康祈上候。 敬具

一月十八日 中支派遣軍吉住本部隊気付

人見部隊兒玉隊

H

立教大学長殿

11. 差出人…年不明 一月二九日付 I 書簡 (軍事郵便)

拝啓向寒の砌愈々御清勝之如奉慶賀候。出征以来絶えて御無音ニ打過候処、九月卅日付官報を以て小生進級の爲め学部を代表御祝詞ニ接し恐懼ニ不堪候。不肖先輩の驥尾ニ附し御奉公致居しニ此の恩命を蒙りしも一重ニ各位御後援の賜と感激致居候。益々元氣旺盛ニテ軍務ニ精勵可致候処乍懼御安神相願度右延引御礼旁々近況御一報迄。 敬具

十一月廿九日

12. 差出人…一九三七年一月一日付近藤英 (学生課 書記) 書簡 (軍事郵便)

謹啓 応召以来一方かならぬ御芳情を重ね今般更に鄭重なる御慰問を賜り厚く御礼申上候。日本男子の意気地として兎に角嘆願之上第一線に出陣致候。然に戦運拙く御報告の程も無之赤面の極みに有之候。

其後現在地附近一帯平定臨廳政府も去る十五日設立したるに付二三日中南方に移動する予定に有之候。

中隊の総勢二百六十人今後の任地は彰徳⁽¹⁾以南と思意致し候へとも場所により一戦必勝快報申上らる様も出来得る事と存し候。

先は御礼旁々各位の御隆盛願上候。

十二月十八日

於邯鄲⁽¹⁾ 近藤英

相親会⁽¹²⁾ 御中

13. 差出人…年不明 二月二二日付 J 書簡 (軍事郵便)

拝啓 時下酷寒の砌、傍々御健勝の御事と遙察申上ます。

小生国境警備に服務中、病魔に仆れ、先月末当院へ後

送されて参り一意療養に精心いたし再起を期して居りました処、明廿六日大連出帆の病院船にて内地還送と決定いたし満洲大陸とも、訣別を告げ在満二年間の悪戦苦闘の生活が走馬燈の如く想出され、哀惜の念を禁じ得ません。

来年勿々には懐しい東京へ着く予定にて皆様との再会を楽しみにいたして居ります。

帰還後は留守居勤務に御奉公の実を挙げ御期待下さる皆様への報恩の気持に替へ度いと存じます。

向寒の砌、傍々御自愛下され幸多き新年を向へられん事を遙か御祈りいたして居ります。

先は右御一報迄。

廿二日

敬具

J 拝

教職員

御一同様

侍史

写真説明

十二月十九日 立教出白衣の勇士が奇蹟的懈悟をいたし大連よりfも来り記念撮影をいたしました。

○ d (旧姓 I)

○ e

○ f

○ g (前ホッケー部主将) ○ J

○ h

gは旅順予備士官校¹³⁾にて幹部候補生の教育中です。

14. 差出人…一九三七年一月一六日付K書簡(軍事郵便)

拜啓嚴寒の候、既に本年も餘日無之候処、母校に於ける教職員学生御一同の御健祥を遙に慶賀仕候。特に野球・ラグビーを始め各部の快ニュースを聞く毎に在学当時の思ひ出を新にし戦線に於て更に立大スポーツ精神を發揮せん事を誓ひ居り候。我等ハ七月三十日召集、北支現地向い現在西部鉄道警備隊の任に就きて既に四ヶ月、数次の討伐戦闘に参加せるも幸ひにして戦死傷数名を出だせるに過ぎず。愈々精勵邦家の為に一死報国の覚悟に御座候。今や明朗北支新政府建設の機運に臨み感激に不堪近況御報迄申上候。

15. 差出人…年不明四月二二日付L書簡(書状のみ所収)

極寒の異郷の空にも長閑な春が訪れて参りました。非常

時に於ける長期交戦も愈々最高峯に達し、国民の緊張も益々固く我々將兵の為に銃後の力は充実し、我等第一線にある者の意を高くして呉れて居ります。

斯うして故郷を離れ毎日の勤務や訓練に身を致して居れるのも皆様方の熱意あつてと深く感謝致して居ります。そして余暇には何時でも故郷の空を仰ぎ去りし母校の想出を胸に画いて居ります。そして変つた事や新しい事が知りたいものです。

又昨日は慰問品を頂戴致しまして嬉しくてなりません。待つものは故郷よりの便りです。それが私達の心の慰みです。

元氣一倍他の先輩諸兄に負けぬ如く一層の努力を以つて『朝に夕に鍛えつ練りつ』¹⁴皇国の為に死を以つて御奉行致します。何卒御安心の程を願ひ上げます。先づは御礼傍々御一報迄。

四月十二日

L

満洲派遣牡丹江省大城子¹⁵軍事郵便所気付

中部隊福田隊

16. 差出人…年不明八月六日付M書簡(軍事郵便)

拝啓平素は軍務多端とは申し乍ら意外の御無沙汰に打過

き誠に申訳無之次第平に御恕し下され度候。今年は稀有の水害に続き殊の外猛暑炎熱との事にて御一同様は如何御消光遊ばされ候や。

戦長期に亘る折柄国内にては銃後の御後援に万全の御辛勞遊ばさるゝと共に経済界の画期的統制により従来生活様式を一変せざるを得なくなり益々国を挙げての非常時と相成り、却つて銃後を御守り下さる皆々様の日常の御勞苦を衷心より感謝奉り候。

聖戰茲に一年有余酷暑烈寒を征して北支に中支に或は又南支に皇軍の瀏々たる戦果は等しく列国の警異となり益々国威の發揚せらるゝ所と相成候。然し乍ら第三国の積極的対支援助と満「ソ」国境の紛擾とは益々事變の重大性を加へるものにして吾が空軍にも此の事局に善処し其の使命の達成に邁進し以つて銃後の各位の御期待に応へ奉るの準備有之候。此上乍ら益々御鞭撻を相仰ぎ度御願ひ申上候。

酷暑熾烈の期に臨み御一同様々自愛專一に遊ばされ度く、此度部隊の改編完結し漸く住み慣れし基地を去りいよ／＼第一線に活動し得るの好機に臨み平素の疎情を謝し併せて暑中の御挨拶申上候。

八月六日

草々頓首

北支派遣徳川部隊気付

西岡部隊長野隊

立教大学教職員御一同様

M

17. 差出人…年不明八月二三日付N書簡(軍事郵便)

残暑御見舞申上ます。

過日は心からなる慰問品御送附下され誠に感謝感激に堪えません。早速ながら陣中の楽しみとして喜びを領ちました。御蔭様にて私共一同大いに元気で御奉公致し居ります。故何卒御安心被下度。当時任務の為遠く出掛けて居りましたので御返礼延引致し申訳ありませんでした。当駐屯地には立教出身者(学部三中二)若干あり。北満立教会が出来そうです。遠く離れて同校出身者の集るのも何とも言へません。北満は正に酷暑の気節も過ぎ既に朝夕涼しく間もなく寒くなります。皆様の御期待に沿ふ様鋭意頑張ります。時節柄折角御自愛專一と御繁栄とを祈上ます。

先は取急ぎ右御礼迄。

敬具

18. 差出人…一九三八年八月四日付O書簡(軍事郵便)

拝啓皆様益々御多祥奉賀候。

小生去ル九月十五日応召以来色々御厚情を賜り難有御礼申上候。又今度は結構なる御慰問品送り頂き感謝の言葉も御座無候。早速戦一同と共に相分け申候。

小生当地⁽¹⁾警備の任に就きて早や八ヶ月、近く原隊にては第一戦の補充の爲め(高橋部隊)出動致す筈にて当地よりも先発として既に一回の船にて○○名出帆致し候。近く吾々も出動する筈に御座候。

色々と申上度き事多々有之候へ共、許されざる為めにて失礼仕可候。先は御礼旁々近況迄。

草々

19. 差出人…一九三八年四月二五日付P書簡(書簡のみ)

拝啓時下益々御清祥之段慶賀この事に奉存候。陳者此度は御心に慰められ結構なる慰問品御恵与に預り小生の慰藉実に譬ふるにも無之此の寒寂の境かゝる御同情ある皆々様の御厚意に接し得たるは誠に小生の幸とする処にして永く銘肝に不堪候。

顧みるに我等の戦績としては余りにも簡単にして花やかに

説明し皆様に面白く御聴取願ふ程の記録とて無之は甚だ遺憾に存じ我隊の如きは言はゞ日蔭者にて第一線部隊の遙か後方に於て兵站の守備を任務とし誠に小生の如きは経理員として陣中生活は第一線将士とは比ぶべくもなく至つて味きなき日を迎へては送る有様にして只々慙愧の外無之候。願はくば一死以て国に報ゆる時機来たらん事を萬望致居るのに有之候。

現在我部隊の駐留地たる〇〇は誠に見る影もなき荒れ果てたる北支察南^のの一寒村にてその不便さ云はん方なく慰安物とてはなく出征以来九ヶ月寔にみぢめなる生活を致し居候。

只時折敗残兵或は匪賊討伐により生気を取り戻し気分^の転換を計る位が関の山の現状に御座候。

乍末筆学長殿始め田邊教授殿、富田教授殿、久保田教授殿、根岸教授殿、矢澤殿に呉々も宜敷く御伝声被下度願上候。

先は右御礼旁々近況御報迄。

四月廿五日

内蒙派遣連沼兵团常岡部隊

成澤部隊主計少尉P

立教大学御中

草々

20. 差出人…一九三八年一〇月一六日付Q母書簡(封書) 庶務課受付一〇月一八日

拝啓

秋一日く〜と深み行き肌身に添ふ風も冷たく感じる様に成りました。皆様にはお恙がなく御過ごしのこと、拝します。本日は御親切なる御書面を頂戴いたしましたして拙なき筆を運び続けた次第でございます。

尚Q在学中、海山越えての皆様の御厚情と御指導の賜と存じ心中から厚く御礼申し上げます。

此の度去年拾壹月拾七日に夫を亡しその寂寥の消えやらぬ最中に名譽の召集を相受け丁度父の初七日に晴の征途に就き唯今北滿討匪に軍務精勵いたしておりますこと、存じます。任務に日も浅く一年も参りませずに皆様のお力と部隊長殿のよき御優愁と御指導の御力添への報もございまして重なる名譽の進級に私達は涙してゐます。

夫も存命中なら如何にお喜びし事かと存じ幸雄もさぞかし銃後の皆様へ御期待に添ふ様一層御奉公すること、親心として密かに信じております。

長期抗戦に対して戦場の兵士並に銃後の者も東洋平和の御代の来らんことを祈り待つと俱に銃後を守り将士に感謝しつつ、私達は元気で夫亡き後はQを唯一人の力として恙がなく過しておりますから何卒他事乍ら御安心遊ば

して下さいませ。

尚御親切なる御言葉に甘えまして御返事申し上げます。

満洲国牡丹江省新密山米澤部隊夕部隊

砲兵中尉

Q

(此の月末から来月にかけて内蒙古のチャムス⁸⁸方面に転隊いたすとか申しておりますが部隊名は変りませぬのでQまで御はがき頂きますれば幸かと存じます)

取りあへず御親切なる御言葉を有り難く存じまして拙き筆を運びました。

悪しからず御寛容の程を御願ひすると俱に皆様にも御時候柄御自愛專一の程を御祈りしております。

十月十六日

草々

立教大学

庶務課

御中

母

Q

Q母

21. 差出人…一九三九年(カ) 月日不明付Q書簡(軍事郵便)

過日は結構御慰問品御送与下さいまして本当に有りが度ふ存じました。厚く御礼申し上げます。一昨年勇躍出征以來早や丸二ヶ年近く真に微力では有りますが元氣一杯一死奉公の念に燃え活躍致して居ります故乍他事御放念願ひます。

何分にも手紙書く間も思ふに任せず大変失礼致して居りましたが諸先生方にも増々御健勝に在らせらるゝ事と御慶び申上げます。

過日同期生の「ドイツク・ミネ」君皇軍慰問に来ましたので色々と諸先生方の御様子或は同窓生の有様等も聞かせて貰ひましたが色々心強く存じますと共に本当に何もかもなつかしく存じ一入学生時代が思ひ出されて仕方有りませんでした。

我が部隊は一昨年北支の戦闘に参加し命に依つて新任務に服して居ります。

出征以来の数々の貴い体験は本当に貴重なもので有り生涯忘れぬ事は出来ません。良い修養になりました。我々現在○○○撃滅に多忙を極めて居ります。戦争は仮令どんな事をしてゝも必ず勝たなければ成らないと思へば労苦も何も問題では有りません。決して諸先生方の御

教へに逆き母校の名譽を汚す様な事は絶対致しません。呉々も御安心願ひます。一年の半分以上を占める酷暑期も漸く終りやつと昨今大陸にも春がやつて来ました。愈々思ふ存分に御奉公する事が出来ます。松花江の黄流も勢ひ良く流れて居ります。陣中に居りますと内地より御書状いたゞくのが何より本当に嬉しく存じます。先生方にも御暇が御座いましたら是非御書状いたゞけます様伏して御願ひ致します。

内地も愈々梅雨期も間近に何かと氣候不順の事と存じます。呉々も御身体御大切に御自愛の程陣中より御祈り致して居ります。

先は取り急ぎ御礼方々近況報告まで

満洲三江省佳木斯¹⁹⁾

岡本部隊気付夕部隊

陸軍砲兵中尉 Q

(昭和七年経済科卒業)

22. 差出人…一九三八年一〇月二八日付R書簡(軍事郵便)

拝啓

秋冷の候お変りはありませんかお伺ひ申上ます。私事其

の後無事元気で君国の為め御奉公致して居りますから何卒御安心下さい。これも偏に神明の御加護と銃後各位の御熱誠の賜と信じ厚く感謝し奉ると共に一層奮勵して居る次第であります。

さて本日は結構なる慰問品を御恵贈下され、いづれも陣中千金に代へ難き品々にて御芳志有難く厚く御礼申上ます。四月以来此の山西省南部地区に侵入した抗日軍は其の數三、四十万に達し一時は暴虐の限りを尽くし、或は道路を切断し或は鉄道を破壊するなど盛んにゲリラ戦術を使つてゐましたが我軍の五ヶ月間に互る猛攻の前に壊滅せられ北支最大の難関と言はれた当地方も漸く明朗となり新五色旗と日章旗は空に輝いてゐます。

九月十一日より垣曲に向ひ千米以上の山岳を踏破しあらゆる辛苦を嘗め征戦幾四十日間無事奮闘してきました。時既に秋氣清く露營の夢も秋風に覚め易き時第一線將士は更に緊張精勵し銃後国民の御期待にそうやう決意して居ります。

事変は長期戦の第二段階に入り国民全能力を發揮して抗日支那を打倒すべき折柄御壯健にて御活躍の程はかに御祈り申上ます。

次に野球部員一同の元氣なニュースを時々拝見致して居りますが今秋も殘念な御成績でしたが一同のスピリトがないのと、努力が少々ほしい様に思われますが何分宜し

くお願い致します。

先づは御礼旁々陣中の近況御一報申上ました。

十月二十八日

R

職員御一同様

23. 差出人…年不明九月二〇日付S書簡(軍事郵便)

拝呈 陣中ヨリ一筆啓上。今回ハ結構ナル御慰問品賜り厚ク御礼申上候。小生儀出征以來益々頑健広大涯シナキ中支ノ眩野ヲ西ニ東ニ転戦ノ上目下〇〇〇山脈ニ沿ヒ〇〇方面ニ向ツテ進出中ニ御座候。

帝国軍人トシテ一死殉国奉公ノ誠ヲ盡スベク覚悟仕リ居り候。 敬具

九月二十日

24. 差出人…年不明一〇月一二日付T書簡(軍事郵便)

学院の御発展を御慶び申し上げます。

御無沙汰して居りまして申訳御座いません。過般は御鄭重にも慰問の品を沢山に御恵送下さいまして有り難う存じました。

出征してからも十三ヶ月余になりますが至極元気でやつて居りますから御安心下さい。

私の部隊は殆んど平漢線[㊦]に沿ふてのみ戦闘をしてきました。一番楽な道を通つて来たのではないかと思はれます。

中卒では黄河堤防破壊で水攻めにされましたが苦しめられたのは皇軍ではなくて農民でした。

六月末より今日に至る迄三ヶ月余新郷に滞在、附近の警備に任じて居ります。

学院からも多数出征して居られる様ですがなか／＼逢ふ機会はありません。今迄に逢つたのは乙氏i氏j君の三名に過ぎません。i氏は黄河を渡つてから負傷されたと聞いて居ります。其の後の様子は知る事が出来ませんが、一日も早く全快せられる様祈つて居ります。又、寒さに向ひます。皆様の御健在を祈ります。

十月十二日

不備

河南省新郷にて

(商昭六) T

立 教 学 院 御 中

立 教 学 院 校 友 会

追記、校友会報までも出征者の所属部隊名が掲載されたら何彼と便利かと存じます。

25. 差出人…年不明四月七日付U書簡（書状のみ）

謹啓

陽春の候、教職員御一同様には愈御清祥の段奉大賀候。其後は久しく御無音に打過ぎ軍務やら私事に捉はれ遂々失礼の段平に御容赦願上候。

今般小生出征中は色々御厚情賜り厚く御礼申上候。

御蔭様にて小生極めて元氣にて戦闘も一段落を遂げ今や長期作戦行動に精勵致居候間何卒御安心被下度候。

扱て御一同様より御送り下されし御慰問品昨日有難く拝受仕候。御遠路にも拘らず斯くも御手厚き御配慮品賜り只々感謝の外無之厚く御礼申上候。

先は取敢ず御礼申上候。春暖とは雖御身御自愛專一の程、江南の陣中より御一同様の御健勝を御祈申上候。

草々
少尉 U
皆々様によろしく。

四月七日 上海派遣谷川部隊島内部隊松田隊

立教大学教職員御一同様

26. 差出人…一九三九年月日不明付竹村豊太郎（予科專任教授）書簡（軍事郵便）

拝啓

慰問品落手しました。先頃の襄東会戦⁽²⁾には我々も参加しましたが、その準備のため東西に駆け廻つてる最中に届けられ、開けるひまもなく前線に出てしまったため遂に御挨拶が遅れましたが、御厚志の籠つた色々の品物難有く頂戴しました。

出征以来満一年を過ぎ一死奉公の念は愈々堅いのであります。が学校には当局にも同僚諸君にも種々御迷惑かけ居ること申訳なく、又種々公私の御厚情に対して感謝の外ありません。日頃感慨無量なのでありますが繁多な軍務と兵馬倥偬のなかにあつていつも御無沙汰致し居ります。

月 日

竹村豊太郎

立教大学庶務課御中

27. 差出人…年不明九月六日付V書簡（軍事郵便）庶務課受付一〇月三日

拝啓

残暑之候御枝益々御隆昌之趣慶賀至極に奉存候。降二小生儀御陰にて愈々頑健に皇国の為め奮闘致し居り候間乍他事御休心奉度候。

陳者今般御校より慰問一箱御送付に預り深く感謝仕り候。時恰も物資に窮し居る折からとて誠に得難き品々に珍重致居り候。銃後に於ける各位の御支援は全く出征將兵を凌ぐ目醒き御活動にて之の御勞苦に対し我々一同は一層奮起奉國に邁進する決心に御座候。

昨夏天津出発以來河北、山西に恒に転戦幾度か幸ひ今日まで武運長久なるを得たるは是れ偏に各位の御援護に依るものと只管感激に耐へざる次第に御座候。炎暑もいつしか秋風と変わり朝夕は涼味さへ加はり申候折から皆々様各位の御健康を遙かより御祈り申上候。

頓首

於運城²²○○地

V

立教大学長 殿

尚職員各位へ呉々も宜敷御鳳声の程奉願候。

28. 差出人…一九三八年四月一〇日付W書簡(書状のみ)

拝啓

春暖の候 愈々御隆昌の段奉慶賀候。

陳者此度は結構なる御慰問の品沢山に御送附に預り深謝奉候。

扱て万才裡に懐かしの母國を旅立ちてより早や八ヶ月炎熱燃ゆるが如き候より名物の高粱も枯れ果て、一目拡張たる大平原の物足りなき秋も瞬時にて木枯し吹き荒ぶ極寒も過ぎ今や李やいてして小説、歌に余りにもロマンテックな内地にては見られぬライラック(リラ)の花の咲き誇る我々第一線に働く者の全く凌ぎ好き候と相成り候。其の間御陰様を以て至極頑健にて一意専心軍務に精勵致し我が一生に思ひ出深き歴史と体験を残して参り候。

当北支も現今にては全く明朗化し輝しき新國家として着々發展致し居候。

之も偏に畏くも御稜威の然らしむる所と銃後各位の熱烈なる御援助の賜と深く感謝感激に不堪候。

然れ共國際關係は複雑微妙を極める現在勝つて兜の緒を締め一層堅忍持久以て皇國の為め御奉公致す覚悟に御座候。

右御礼旁々御一報迄如斯御座候。

敬白

昭和十三年四月十日

北支派遣香月部隊本部板花隊

W (商科昭和一〇年)

立教大学

各位

29. 差出人…一九三八年(カ)月日不明X書簡(軍事郵便)

拝啓

向寒の候益々御清祥の段奉慶賀ます。先日は凶らずも重宝なる御慰問の品御送附被下厚くお礼申上ます。

小生北支上陸以来はや十ヶ月近くとなりました。その間幾多の体験をえました。

北支には冬がおとづれ曠野の彼方羊の群が放牧されてゐるのも大陸の冬景色です。

漢口陥落後時局は更に新段階に入りました。我々は益々奮勵努力、御奉公の覚悟であります。先は御礼旁々御一報まで。 草々

30. 差出人…一九三八年(カ)四月一二日付Y書簡(書状のみ)

拝啓

大変御無沙汰致しました。此度は御職員御一同様より結構な御慰問の品とてお送り被下厚く御礼致します。小生元氣にて軍務に精勵致しております。

東京はポカ／＼暖くお花見頃と思ひます。北安鎮²³は春追しの状態でしたが十日は猛烈な吹雪となり一寸先きも見えない有様でした。

小生昭和十二年二月北滿警備の重任を擔いて泰安鎮²⁴に駐屯、北支事變勃発するや七月廿一日出動の命を受け十川部隊南迫隊に配属せられ天津を振出しに獨流鎮²⁵、承德²⁶、遠く内蒙多倫²⁷、張家口²⁸、八角台の激戦を終へ、更に前進を重ねて山西省に入り或時は馬鈴薯と水に飢を凌ぎ、一本のロープを命の親と頼みに城壁を攀ち登り、途中空爆に遭い隊の半を失い乍らも突撃を重ね遺憾なく我軍の威力を發揮し敵をして抗ふ余地を与へず到處勝利の一字でした。

我十川部隊は惇縣城の総攻撃を最後に三ヶ月に亘る戦いを終了。北支に輝しき戦蹟を残して再び北滿警備のため十月四日早朝北安に到着、充来の任務たる対ソ戦争準備に怠りありません。

北支事変も南京陥落と共に長期戦に入り、既に日本全土以上の地域を占領亦蘇滿国境風雲急を告げ、噴火山上の日本です。銃後の皆様の盛大な御後援に我等は心残りなく国家の為に俣す事が出来ます。

末筆乍ら母校の隆盛と御職員御一同様の御健康を遙か北滿の地よりお祈り致します。
右簡単乍ら御礼旁々御通知迄で。

四月十二日
御職員御一同様

滿洲派遣北安鎮
十川部隊日高部隊
Y

匆々

31. 差出人・一九三八年七月六日付和田正俊（昭和13年）
予科漢文専任教授、学生課主事）書簡（軍事郵便）
拝呈時下炎暑の砌教授職員各位に於かせられては益々御清勝の段奉賀候。洵に小生去ル五月二日負傷²⁸以来折角野戦病院にて療生遂に六月廿二日全快只今再び愛する部下と共に元気に愉快に軍務に従事致居申候由、右様御放神被下度候。留守宅よりの通知によれば学長先生始め教

職員各位に於かせられては懇々弊屋留守の者に御見舞被下候由御芳志の程感謝仕候。

今後は一層努力致し奉公の微表を捧げ各位の御期待の万一に副ひ度くと愚考仕居候。

先ハ不取敢御厚礼旁々近況御報迄如斯御座候。

七月六日

敬具

立教大学
教職員各位

和田正俊

回覧

出征中の和田先生より別紙の如くお便りがありました。
御覧の上順次お廻し願ひます。

庶務課

学部教ム スミ 学生人事課スミ 学友会事務所 配属
将校室 図書館

32. 差出人・年月日不明付和田正俊書簡（軍事郵便）

拝呈時下秋冷の砌各位益々御清適の段奉賀候。洵に小生

か其後打絶えて御無沙汰仕り申訳無之候。扱て今回の戦争は山嶽地帯の激戦にて物凄き迄に御座候。御蔭様にて微傷にて相済み日夜元氣に有之候処右様御放神被下度候。先ハ御伺旁々右迄。

敬具

33. 差出人…年不明 一月一七日付和田正俊書簡(封筒のみ、軍事郵便)

34. 差出人…一九三八年四月一七日付乙書簡(書状のみ)

拝啓

昨年八月北支出征以来久しく御無沙汰いたしました。土肥原部隊の一兵として出陣転戦八ヶ月常に達者で軍務に臨んでおりますから乍他事御休心下さい。

河北作戦も黄河畔まで全く有力な敵もなく去る二月山西に遠征、今再び河南省懷慶³⁰に帰り来て次期作戦の準備中です。

当地には昭和三年卒業のA兄もおられます。時々遭ひますが、例の健康そのもの様な張り切り方です。

本日御送附頂きました小包落手いたしました。御厚意有

かたく全室の者みまで封を開く様な有様、戦地に於て内地からの便りがどんなにうれしいかお話し出来ない程です。

まして三ヶ月も全く内地からの音信もないのですから三月も前の新聞をうばい合つて見る様な始末です。校友の諸兄も大分出征された様ですがみな活躍しておられる事と存じます。昨年十二月にはK氏に逢ひました。

当地はもう六七月の氣候日中などは可成暑くこれからが思いやられます。そのうえ雨季をひかえての用意で全く寧日ない有様です。

麦の穂もすつかりのびました。先日来梅と桃と梨と菜の花と一揃に咲く氣候です。

内地では銃後の人々の御苦労はさぞ大変な事でせう。こうして安心して出征出来るのも皆国の人々のお蔭と感謝いたしております。

この手紙のつく頃は三度び行動を起してゐる事でせう。土肥原部隊の活躍を御期待下さい。

末筆ながら皆様によろしく。先は御礼旁々近況まで。

勿々

北支派遣土肥原部隊気付

石原部隊池永隊

主計少尉 乙

四月十七日

(昭三年卒)

立教大学御中

35. 差出人…年月日不明七月八日付 a 書簡 (軍事郵便)

暑中御伺ひ申上候

七・八

北支派遣徳川部隊気付

柴田 (静) 隊

a

今後共身魂の打続く限り、又在学中、陶冶致され候、陸上競技部精神を以て不撓不屈長巨離レースの覚悟、呼吸を以て迷蒙支那打倒に備ふべき覚悟に御座候。
先は簡單乍ら御礼旁々近況御一報迄申述度如斯御座候。

敬具

北支派遣徳川部隊気付

柴田 (静) 隊

a 拝

立教大学御中

37. 差出人不明…年月日不明書簡 (書状のみ)

拝啓

36. 差出人…年月日不明 a 書簡 (書状のみ)

陽春の候、新学年を迎るに当り母校の益々隆盛なるを遥か北支の戦線より御慶び申上候。

聖征出動以来既に幾星想、昨夏の炎天下厳寒を過ぎ再び炎熱の候を迎へんとするの時期に立至り居り候。

以御陰益々元氣旺盛目下某重大任務に服務致し居り候。

扱此度は母校諸先生、学生諸兄校友諸賢より成る熱懺窺れる慰問品御惠贈に賜り誠に有難厚御礼申上候。

拝啓陽春の候と相成り皆々様には変りなく御機嫌麗しいこと、拝察致します。御蔭様にて小生は相変わらず壮健一日も休むことなく忙しい経理業務に服務致して居りますから他事ながら御安心下さい。事変中ですから只御無沙汰勝になるにも拘らず何かにつけ御厚情にあづかり感銘ノ至りに存じます。

さて昨日は時局講説集並に日用品娯楽品等沢山御慰問下され厚く御礼申上げます。出身校からの慰問にて同室の他大学出身将校等も其の鄭重にして親切なるに驚いて居ります。衷心感謝致します。母国では桜は既に葉桜にな

り百花其の美を競ひ都会は各種スポーツの開幕となり田園は植付季で繁忙の真最中ならんと思考せられます。海を隔てたアジャ大陸山東省地方は連続的快晴に恵まれ寒気は夢の間に飛び去り、昨今では時折強風吹き来りて砂塵物凄くして恰も初夏の如く暖と申すより暑さが感ぜられます。樹木の関係からか風情の乏しい曠野河川にも明朗曲を思ひ浮べしめるが如き新緑となり避難民は多く古巢に帰りて皇軍の監督下にその生業に就いて懸命に働いて居ります。北支那を境界づけて居ります黄河は東洋幾千年の文化史を秘めて悠々と流れ、穏な泰山山系は東西に連り孔子誕生の地も近くにあり又大公望で有名な黒虎泉蓮の大明湖趵突泉千佛山等当地方には史蹟が豊富であります。空には我飛行機が縦横に飛ぶ時には高空を飛ぶ敵の編隊機をも見受けられます。昼夜の別なく部隊が移動し軍需品の輸送あり、それ敗残兵が出た、便衣隊だ、やれ討伐だ、警戒だと野戦生活は油断も隙も無い緊張振りであります。津浦線³¹ 膠濟線³² 共我が決死的復旧工事の結果大黄河の大鉄橋の如きは全長壹貳五〇米突餘、四年の歳月と約六百万元の工費を投じて完成したと云われて居ますが、我が工兵は爆破橋とわ別に架橋工事を開始し短時日に且美事に完成され汽車の音が聞かれなかった期間の淋しさに比較して毎日多数の乗降客あり城内や商埠地³³には洋車は活潑に飛び歩き火炎を掠奪にて

不気味な正体をさらけ出して居りました役所や商店街も小規模ながら開業につれて活況を見せカフエーや飲食店は復興の速度を物語るかの様に乱立の状態であります。又当地は事変と共に土民は避難遁走して居り私共は支那軍の荒し廻つた後へ急速進撃致しましたから一時物資は乏しく加ふるに冬で有り金銀貨幣価値の差等にも物価は占領地とも思へぬ高騰振りでありました。支那の女は多く纏足をして居り国風でも有りませうが屋内に在りて格別仕事をする様にも見へませんが男は朝早くから私共の想像以上に活動致します。日本軍に商売をする為の子供等も可愛らしい手を差しのべ籠入れにして煙草や卵、果実等売り歩き又街頭市場には支那らしい大声をはりあげ生野菜や三尺以上もある大きな鯉鱈や鮎、鱈、季花魚類の川魚、骨董等を売つて居ります。又彼等は苦力となり地排車や單車と云ふ支那車輛をひき能率は別として賃金は廉いものにも拘らず支払の正確な為めか不潔な恰好で働いて居ります。従つて今後の対処策として考へられます事は先づ日本人の積極的移住進出を要し専ら帝国の実力のあるところ威力の徹底を期し、鉄、塩、石炭、羊毛、棉花等農工業の生産額を増大ならしめ防共戦線の拡大強化と相待つて日、満、支、東洋プロックの実質的飛躍こそ急務であり大いなる期待を以て諸般の開発に協力せねばならないと存ぜられます。

盛夏来りなは当地の温度は華氏にて二二〇度以上に達するとの事です。支那家屋は殆んど瓦と煉瓦造りであります。立派な建築物住宅では其の固定的日覆施設の完備して居るのを見ます。又下水の不完全なのを見るにつけ今から其の暑

(以下、書状無し。断簡)

注

- (1) 現在の河南省新郷市。
- (2) 和田正俊教授。
- (3) 一九三八年七月から一〇月にかけて行われた武漢作戦のこと。一九三七年二月、南京陥落後、武漢は中国の軍事、政治、経済の中心となった。日本軍は「速戦速決」方針で日中戦争の早期終結を目指し、武漢占領を図った。作戦は武漢周囲から安徽・河南・江西・湖北の四省の広大な範囲で、大小の戦闘が数百回に上り、激戦が繰り返げられた。一〇月二五日に武漢は陥落したが、四ヶ月余りに渡る戦闘で日本軍の「速戦速決」方針は破綻することになった。
- (4) 廬山は江西省北端部の九江市南方に位置し、北は長江、東は鄱陽湖に臨む名山。武漢作戦時には山岳戦となり、激戦地となった。
- (5) 大阪府堺市大阪陸軍病院金岡分院。
- (6) 北京から漢口を結ぶ平漢鉄道（当時は北京が北平と改称されていたため、平漢鉄道と呼ばれた）の沿線。
- (7) 徐州作戦。一九三七年一月から五月までの五ヶ月余りに及ぶ津浦鉄道沿線で行われた戦闘。徐州は津浦鉄道（天津から南京浦口までを結ぶ）、隴海鉄道（海州（現在の連雲港市）から宝鶏を結ぶ）の中樞

で、戦略要地であった。日本軍は六方面から徐州に進軍し、大包围をかけ、一九三八年五月一九日に徐州は陥落した。

- (8) 一九三七年九月、日本コロムビアから出された軍歌「露宮の歌」の一節。作詞藪内喜一郎、作曲古閑裕爾。
- (9) 注(3)を参照のこと。

- (10) 河南省北部の都市の旧名。現在の河南省安陽市。平漢鉄道の沿線であった。

- (11) 現在の河北省邯鄲市。河北省南部に位置し、平漢鉄道の沿線であった。

- (12) 立教大学教職員で構成された親睦団体。

- (13) 旅順には陸軍予備士官学校が無い。奉天甲種幹部候補生隊か、一九四〇年八月一日、陸軍予備士官学校令の改正により設置された奉天予備士官学校（一九四一年八月一日廃止）のことと考えられる。

- (14) 立教大学校歌「栄光の立教」の二番の歌詞の一節。
大城子は、俗称で瓦房という。喀喇沁（カラチン）中旗（地名）王府の所在地。喀喇沁中旗は現在の遼寧省喀喇沁左翼蒙古旗自治県および凌源県と建昌県に相当。寧城県は、現在の中華人民共和国内モンゴル自治区赤峰市にあり、大城子は大城子鎮と推定される。

- (15) 現在の澎湖島馬公市。
- (16) 現在の内モンゴル自治区。
- (17) 現在の黒竜江省ジャムス市。

- (18) 注(8)と同じ都市。ジャムスの漢字表記が佳木斯であった。
- (19) 注(6)を参照のこと。

- (20) 一九三九年五月、襄陽（現在の湖北省襄陽市襄陽市（県級市）。漢口北西二八〇キロ）周辺において行われた一連の戦闘のことを襄東会戦という。

- 22 現在の山西省運城市。
- 23 現在の中華人民共和国黒竜江省黒河市北安市（県級市）。
- 24 現在の黒竜江省齊々哈爾市依安県（県級市）。
- 25 現在の天津市。
- 26 現在の河北省承德市。
- 27 現在の内モンゴル自治区ドロンノール県。
- 28 現在の河北省張家口市。
- 29 個人消息「出征中の和田正俊教授は五月二日〇〇〇にて戦傷され、野戦病院に入院加療中なるも、その後の経過良好の由通知ありたり。」
- 30 『立教学院学報』第五卷第五号、一九三八年六月。
現在の河南省焦作市沁陽市（県級市）。
- 31 天津から南京の浦口までを結ぶ鉄道。
- 32 膠州湾の青島と山東省の済南を結ぶ鉄道。
- 33 商埠地とは中国が外国との通商のために開放した外国人の居留地のことという。居留地には、外国との条約によって設けられた地域と中国が自発的に開放した自開商埠地の二種があり、自開商埠地は中国が自国において管理権を有し、行政権、裁判権を行使する外国人居留地であった。ここでいう商埠地は、37の記事内容や「津浦線膠済線」といった鉄道名から、一九〇四（明治三七）年に清国が自発的に開市した済南のことを指すものと考えられる。